

国立民族学博物館

特別展「舟と人類—アジア・オセアニアの海の暮らし」

開催期間：2025 年 9 月 4 日（木）～2025 年 12 月 9 日（火）



【特別展の内容・目的】

- 日本ではあまり知られていない東南アジアやオセアニアの南太平洋圏や北太平洋圏における舟とその多様性を、海を越えて移住・拡散した人類の歴史や海を舞台にした暮らしの視点から紹介することで、海域アジアの一部でもある日本の海文化との共通性や歴史性も示しつつ（特に沖縄関連資料など）、比較の視点も踏まえて楽しみながら海への親しみや知について学んでもらいます。
- 国立民族学博物館は近隣の小中学校との連携により、子供たちを対象とした博物館教育にも力を入れてきましたが、本事業でも 2022 年度に開催した企画展の経験に加え、今年に航海 50 周年を迎えるチェチェメ二号が展示されているオセアニア展示を軸に、東南アジア・アメリカ・日本の常設展とも関連させつつ、人々の海との暮らしや海の利用について、子供たちにも理解できる形で学んでもらいます。

1. 特別展示の内容

■開催期間：2025年9月4日（木）～2025年12月9日（火）

■開催場所：国立民族学博物館 特別展示館

■入場者数：35,480人



国立民族学博物館 外観



特別展会場 入口



展示場内の様子（1章-①）



展示場内の様子（1章-②）

【1章】人類が舟を発明したのはいつごろでしょうか。人類学的にはまだ不明な点が多くありますが、ヒトが海を渡った最古の痕跡はインドネシアの原人までさかのぼります。その後、私たちホモ・サピエンスの時代に入ると、各地で海や川を移動した痕跡が増えます。ここではそんなホモ・サピエンス達が原始の時代、水上を移動するために利用していたと推測される舟たちを紹介しました。これまで原初的な舟のルーツとしては、次の4タイプが指摘されてきました。（1）筏とあし舟、（2）皮舟ないし獣皮舟、（3）樹皮舟、そして（4）割り舟あるいは丸木舟です。ここでは現代においても各地で利用されてきた、この4つのタイプの舟を紹介しました。

※上記写真等は特別な許可を得て撮影されたものです。無断転載等はいけません。



展示場内の様子（2章-①）



展示場内の様子（2章-②）

【2章】ここでは日本の弥生・古墳時代ごろに登場し、活躍した準構造船を紹介しました。準構造船とは、丸木舟を船底とし、その上に縦板と舷側板を足して積載量を大きくする工夫をほどこした舟のことです。東アジアでは日本列島で最も多く確認されており、主に考古資料として出土しています。その中から西日本を中心に出土する船形埴輪と、その存在を裏付ける縦板や舷側版を紹介しました。準構造船のサイズは、丸木舟の材料である丸太の大きさに決まります。このため準構造船にはどんなに工夫をしても大きさの限界がありました。その後平安時代までには、日本列島でも竜骨や板材を使う構造船が主流となっていきました。



展示場内の様子（3章-①）



展示場内の様子（3章-②）

【3章】ホモ・サピエンスは人類史上初めて、ベーリング海峡を越えてアメリカ大陸への移住に成功しました。その際、北太平洋を越えるにあたって必須となった道具の一つがカヌーでした。また、カヌーは北方圏に移住した人びとにとって、漁撈や狩猟における必須のアイテムになりました。ここでは本館の所蔵資料から、北方圏の特徴であるアザラシの皮や樹皮を素材としたカヤックと舟を紹介しました。アメリカ大陸へ移住した初期のホモ・サピエンス集団は、日本列島に暮らしていた縄文人や北海道で暮らしてきたアイヌの人びとの祖先集団とも共通性があると言われています。本展示では、寒冷な環境に暮らしてきたアイヌの樹皮舟も紹介しました。



展示場内の様子（4章-①）



展示場内の様子（4章-②）



展示場内の様子（4章-③）



展示場内の様子（4章-④）

【4章】ホモ・サピエンスがその移住や生活において、古くから最も活発に舟やカヌーを利用したのが南洋圏です。古くは人類最古の長距離航海とされるサフル大陸（現在のオーストラリア大陸とニューギニア島からなる大陸）への移住が知られています。またメラネシアや東南アジアの島世界では旧石器時代から、島嶼間における移住手段は筏や舟でした。新石器時代以降になると、東アジア圏を起源と考えられているオーストロネシア語族集団が、台湾から東南アジア島嶼部、そしてオセアニアのほぼ全域への渡海による移住に成功しました。ここでは、こうした移住を可能にした舟で、現在もオセアニアや東南アジア島嶼部の各地で利用されているアウトリガー式カヌーの多様性を、メラネシアのクラカヌーやミクロネシア、スリランカやマダガスカルのシングル・アウトリガー式カヌーを軸に紹介しました。



展示場内の様子（5章-①）



展示場内の様子（5章-②）

【5章】本特別展はアジアからオセアニアを主な対象地域としています。そこには日本列島や琉球列島も含まれています。本館は1970年～80年代にかけて、今ではほぼ実用されなくなり、消滅してしまった日本各地の木造の舟や漁船を多数収集してきました。ただ残念ながら、その多くは未公開のまま収蔵庫に保管され、現在に至っています。そこで本特別展では、日本における木造船の中から、人類と舟を考えるうえで興味深いと思える舟資料を厳選し、4資料を紹介しました。このうち、もともと別の機能をもつ道具が、転用された結果として舟となった面白い事例として、新潟県佐渡島の「たらい舟」と沖縄県の「タンク舟」を紹介しました。その他には、準構造船に最も近い古いタイプの木造船でもある島根県の「そりこ舟」、そして沖縄県の「サバニ」を展示しました。



展示場内の様子（6章-①）



展示場内の様子（6章-②）

【6章】海域アジアからオセアニアの島世界に暮らしてきた人類にとって、舟やカヌーは生きていくうえでの必需品でした。漁撈や島から島への移動においても舟は大いに活躍しました。ゆえに人びとは舟を美しく装飾し、その機能を高めるためさまざまな創意工夫をほどこしてきました。一方、舟やカヌーの建造は、手斧と呼ばれる、上から下に向けて木をけずる縦斧が主に利用されてきました。このほかにアジアやオセアニアでは、墨つぼと墨糸も重要な舟の建造道具でした。これは墨のついた糸で木材に直線を引くための道具で、建築道具の一つですが、木材を曲げて利用することの多い舟建造では大いに活躍しました。本展示ではその一例を紹介しました。



展示場内の様子（7 章-①）



展示場内の様子（7 章-②）

【7 章】ここではアジアやオセアニア各地の舟の模型を紹介しました。とくに 1 階展示では紹介できなかったタイプの舟と、歴史的に 8 世紀ごろから各地で出現する木造の構造船について紹介しました。メラネシアのソロモン諸島では、アウトリガーを持たない独特のカヌーも複数存在し、似たような構造の舟は、ポリネシアではニュージーランドのマオリ族が使う戦闘カヌーや、台湾のタタラ舟にもみられます。東南アジアやインド洋圏では、アウトリガー式カヌーのほかに、ダウ船やピニシ船など大型の木造船も建造・利用されていました。一方、日本列島では和船の仲間として、船底材に舷側材を棚のかたちで継ぎ合わせた構造船が主流となり、各地で建造されました。また和船の特徴の一つには櫓の利用もあります。櫓は船尾に設置され、舵と櫓の役割りを同時に担う点で、世界的に見ても独特の技術です。



展示場内の様子（8 章-①）



展示場内の様子（8 章-②）

【8 章】櫓（パドル）は、進行方向に向かって座って漕ぎ推進力を得る船具です。海域アジアには立って漕ぐ舟もありますが、オセアニアではほとんど見られません。一方、オセアニアでは儀礼にカヌーや櫓が使われることもしばしばあります。その際に使われる櫓は、カヌーと共に美しい装飾や彫刻がほどこされ、我々を魅了します。ここでは海域アジアやオセアニアで使われてきた櫓のほか、その周辺世界で収集された美しい櫓を紹介しました。



展示場内の様子（9 章-①）



展示場内の様子（9 章-②）

【9 章】舟を使う人間活動の中でも、最も重要な行為の一つが漁撈です。その漁撈において魚や海の生物を捕まえるための道具が漁具です。このため、人類は捕獲する魚や海洋生物の習性にあわせて創意工夫し、漁具を発展させてきました。アジアからオセアニアにかけて主に使われる漁具には、多様な釣り針、釜、銚や網があります。さらに舟の中には、釣り用の道具箱、帽子など、多種多様なモノたちが積まれました。多様な漁具は、海の暮らしにおける人びとの知恵を語るとともに、この島世界における海洋生物の多様性の反映でもあります。



展示場内の様子（10 章-①）



展示場内の様子（10 章-②）

【10 章】クラカヌーに代表されるように、アジアやオセアニアでは島嶼間の交易やモノの移動にも舟が利用されてきました。たとえば東南アジアでは海上交易の発達によって、商品価値の高い海産物（ナマコ、塩干魚、フカヒシなど）や森林産物（香辛料）が、さまざまな民族集団や人びとの手を介して舟で運ばれました。一方、オセアニアでは、多数の島の間で宝物を贈り合う「クラ」のような、人と人とのつながりに重点を置いた交易が発達しました。ここでは、そのような贈り物の交易の中であつかわれた品々のうち、貝製品や土器、樹皮布を中心に、関連映像も交えて紹介しました。



展示場内の様子（11 章-①）



展示場内の様子（11 章-②）

【11 章】舟は現世とあの世や来世へと人びとを繋げる、あるいは運ぶアイテムとしても認識されてきました。アジアやオセアニアの各地には、そうした霊舟や精霊舟のような信仰が知られています。先史時代においても、こうした信仰は洞窟や古墳の壁画にひんぱんに描かれる舟のモチーフや、霊舟を表現したと推測される土器や木製品、あるいは舟形木棺や石棺にみることができます。ここでは、本館が所蔵する霊舟資料のほか、日本や東南アジアにおける舟の壁画資料、舟形木棺や石棺資料を中心に紹介しました。



展示場内の様子（触れるコーナー-①）



展示場内の様子（触れるコーナー-②）

【触れるコーナー】このコーナーでは、展示品を実際に触って、その感触や重さから舟や舟にまつわる道具を体験してもらいました。櫂は両手でにぎり、漕ぐことで舟を推進する道具です。今回はにぎること、櫂を少し持ち上げることで、櫂の重さや肌触りを感じてもらいました。石斧や貝斧のみがかれた表面やなめらかさ、アザラシの皮の感触、舟の種類とそのかたちなど、手で触れることで得られる道具のもつ特徴や美しさを体験してもらいました。



展示場内の様子（VR 体験コーナー-①）



展示場内の様子（VR 体験コーナー-②）

【VR 体験コーナー】このコーナーでは、航海中の「サンデ」と「レパレパ」から撮影した 360 度映像を、VR 視聴機器を装着して体験してもらいました。「サンデ」は、スリムな船体と大きな三角帆が特徴のダブル・アウトリガー式カヌーで真っ白な船体の美しさと最速時速 40 キロで走ることで世界に知られる漁船です。「レパレパ」は、薄くて軽い手漕ぎの丸木舟です。実際に海上で航海する場合にどのような状況になるのかを 360 度映像で体験してもらいました。

【来館者の声】

- 人間と海というテーマで船を題材に初めて考える機会になりました。
- 櫂には舟を進めるための機能性だけでなく、装飾性も大事にされており、つくられた場所それぞれの文化を感じられた。
- 海が生活と密着しているからこそ、綺麗な海を守る努力をしたいと思った。
- 生活と海のつながりは勿論、山（陸）と海のつながりも強く感じる事ができました。
- 海がまさに生活の場になっている。世界の民族について、また海の広さや多様性について感じました。